

氏神 A 遺跡発掘調査報告書

1998

茨城県八千代町教育委員会

氏神 A 遺跡発掘調査報告書

1998

茨城県八千代町教育委員会



1 遺跡全景



2 層序 (P2G)



3 細石刃核

序 文

素人というものは、突飛な事を考えたりするものです。子供の頃、家の手伝いで畑の中からシジミの殻が出るのを体験したり、畑の片隅に神明様とか十二天様とかいう石碑などを見て来ましたので、もしかしたら、自分の住んでいる屋敷の下に、昔の人たちの生活の跡があるんじゃないかな、というような事を考えてしまうんです。

一昨年の一本木遺跡の発掘調査に続き、昨年の氏神A遺跡の発掘調査と、引き続き考古学のメスを入れていただきました。しかも、そこには数多くの遺構を確認する事が出来ました。昔話ではなく、1万3000年も前に使われていた細石刃核が出土したのですから驚きです。この地が、旧石器時代から生活に適した場所だったという貴重な痕跡です。

もっともっと広範囲に調査の手を加えれば、きっとすばらしい先人の生活の跡を発見することが出来るのではないか、と思うと胸がときめきます。

開発が進むにつれ、遺跡といわれる貴重な研究資料が失われていっただろうし、取り返しのできない損失だったと思うのです。日本列島改造という夢の実現の影で、考古学上の夢が打ち破られてしまったという無念さも残るのではないかと思うのです。

現在は不便になってしまった地域であっても、地殻の変動、氷河期と間氷期の繰り返し、活発な火山活動と相まって、かつては生活に絶好の場所だったかも知れません。こうした事を考えると、考古学上莫大な財産が失われてしまっただろうと心配したりいたします。

発掘調査に携わって下さいました日本考古学研究所の先生方ははじめ、関係者の方々に深く頭を垂れて序文とさせて頂きます。

平成10年3月

八千代町教育委員会

教育長 坂 入 誠 一

例　　言

1. 本書は、N T T 携帯電話基地局設置に伴う氏神A遺跡(町番号78)の発掘調査報告書である。
2. 氏神A遺跡は、茨城県結城郡八千代町大字栗山字氏神から大字東落田字大須賀にかけて所在するが今回の調査は、大字東落田字大須賀811-1、811-8の内324m²を実施した。
3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本コムシス株式会社の委託を受け、八千代町教育委員会が主体となり、日本考古学研究所に依頼して実施した。
4. 調査期間は下記の通りである。
 - ・現地調査：平成9年9月22日～平成9年10月7日
 - ・整理作業：平成10年2月16日～平成10年3月9日
5. 調査事務局等は下記の通りである。

八千代町教育委員会教育長 坂 入 誠 一
・事務局：湯本 充一（生涯学習課長）、坂場 勇（生涯学習課主査兼文化係長）
　　山野井哲夫、佐野 史子（生涯学習課文化係）
・調査員：小川 和博、大渕 淳志（日本考古学研究所）
6. 調査参加者は下記の方々である。（敬称略）

中山 隆光、中山 正一、森 幸三、福田 宏、高野長二郎
砂見 藤、大島千代子、高野とみ江、岡本音三郎、山村 友昭
川島 芳江、為我井直美
7. 本書の執筆は、小川和博、大渕淳志、飯治文博及び山野井哲夫が行った。また千葉県立中央博物館橋本勝雄氏より特別寄稿をいただいた。記して感謝の意を表わすものである。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の関係機関、関係者のご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）

茨城県教育庁文化課、茨城県県西教育事務所、茨城県教育財団、茨城県立歴史館、日本コムシス株式会社、飯岡武義氏（地権者）、藤木三男氏（栗山行政区長）
千葉県立中央博物館、望月明彦氏（沼津工業専門高等学校物質工学科）
9. 本書に使用した地図は下記の通りである。

Fig. 1 參謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「香掛村」
Fig. 3 八千代都市計画図 1/10,000
Fig. 4 国土地理院発行 1/25,000 「石下」 N J -54-30-4-1
10. 調査にかかる記録類(写真、図面等)及び出土品は、すべて八千代町教育委員会が保管している。

本文目次

序文

例言

目次

I	序言	1
1	調査の概要	1
A	調査に至る経緯	1
B	調査の経過	1
C	調査日誌	4
II	遺跡	5
1	遺跡の位置と環境	5
2	周辺の遺跡	6
III	遺構と遺物	11
1	旧石器時代	11
A	概要	11
B	旧石器時代の遺物	13
2	縄紋時代以降	15
A	土坑	15
B	柱穴状遺構	30
C	溝状遺構	35
3	遺物	36
A	縄紋土器	36
B	土師器	36
IV	まとめ	39
	報告書抄録	42

挿図目次

Fig. 1	氏神A遺跡付近の地形(1:20,000).....	2
Fig. 2	グリッド配置図(1/200)	3
Fig. 3	氏神A遺跡周辺の地形(1:10,000).....	5
Fig. 4	周辺遺跡分布図(1/25,000).....	8
Fig. 5	氏神A遺跡周辺地形図.....	9
Fig. 6	氏神A遺跡調査区全体図.....	10
Fig. 7	基本上層図.....	11
Fig. 8	旧石器時代確認グリッド配置図	12
Fig. 9	旧石器時代確認グリッド土層断面図.....	12
Fig. 10	関東地方における細石器遺跡と氏神A遺跡の周辺遺跡.....	14
Fig. 11	細石刃核実測図.....	14
Fig. 12	土坑平面図（1）（SK01～05）	17
Fig. 13	上坑平面図（2）（SK06～08）	20
Fig. 14	土坑平面図（3）（SK09～11）	22
Fig. 15	上坑平面図（4）（SK12～16）	24
Fig. 16	土坑平面図（5）（SK17・18）	28
Fig. 17	上坑平面図（6）（SK19・20）	29
Fig. 18	柱穴状造構（ピット）平面図(P1～P11)	31
Fig. 19	溝状造構(SD01)平面図	35
Fig. 20	調査区出土繩紋土器(1/2)	37
Fig. 21	調査区出土土師器(1/3)	37
Fig. 22	氏神A遺跡出土の祭祀遺物(飯岡長治氏蔵)	39

表目次

Tab. 1	氏神A遺跡周辺の遺跡(栗山・尾崎・大間木地域)一覧表.....	6
Tab. 2	土坑観察表.....	39

図版目次

PL. 1	氏神A遺跡遠景・氏神A遺跡近景・氏神A遺跡造構確認
PL. 2	発掘区全景・P 1 G断面・P 2 G断面
PL. 3	上坑SK01・02・03
PL. 4	土坑SK04・05・06
PL. 5	土坑SK07・08・09

- PL. 6 土坑SK10・11・12
- PL. 7 土坑SK13・14・15
- PL. 8 土坑SK16・16断面・17
- PL. 9 土坑SK18・18断面・19
- PL. 10 土坑SK20・溝SD01・ピットP1・ピットP2
- PL. 11 ピットP3・ピットP4・ピットP5・ピットP6・ピットP7・ピットP8・ピットP9・ピットP10・ピットP11・調査風景
- PL. 12 出土遺物
細石刃核・繩紋土器・土師器

I 序 言

1 調査の概要

A 調査に至る経緯

平成9年5月、日本コムシス株式会社からNTT携帯電話の基地局設置にかかり、遺跡の照会がされた。

開発地域は、八千代町史福さん事業で確認された氏神A遺跡の範囲内に入っているため八千代町教育委員会では再度現地を確認した。現況は山林になっているが、周辺の畠から土器が採集されることから、当該地域にも広がっていることが考えられた。そこで、遺構の状況を確認する目的で、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、現況が山林のため下草を刈った後、調査対象地域324m²の内調査可能な部分64m²を3か所に分け、平成9年6月30日から7月3日にかけて実施した。その結果、ローム層上面で土坑と考えられる遺構を数基確認した他、土師器片や須恵器片及び黒曜石の石核が出土した。

以上のことから、八千代町教育委員会では、遺跡の記録保存を図るために、日本考古学研究所に依頼して発掘調査を実施することになった。

(八千代町教育委員会)

B 調査の経過

発掘調査は平成9年9月22日から同年10月7日にわたり開発予定地全域の324m²を対象に実施した。これは遺跡の有無を確認するため先の6月30日より4日間行われた試掘調査の所見にもとづくもので、3ヶ所の試掘グリッド64m²から土坑等の遺構および旧石器時代・繩文時代・古墳時代の遺物が確認されたからである。また調査区の表土層は15~40cmと人為的な地形変化はほとんど認められず、ほぼプライマリーの状態を保っていたことが判明した。そこでまず本調査にあたり、試掘調査の結果から機械力による表土層排除は問題ないことが判り、早速9月22日からバックホーによる表土層除去を開始した。表土層は2層に分層でき、基層であるソフトローム層上面であるII層明褐色土(10YR5/6)で止めることとした。さらに表土層全面除去後、調査区内の遺構および遺物の検出地点を正確に押さえるため、南北方向を軸とするグリッドを設定した。グリッドは調査区が南北24m、東西22mと狭範囲なため5m方眼を基本に、さらに計測しやすく1m方眼を設けた。また表記は5m方眼枠を1グリッドとし、北西隅を起点とする南北軸をアラビア数字で、東西軸をアルファベットを付した。つまり、東西方向を西からA~F、南北方向を北から1~6とし、さらに1グリッド内に1m方眼小グリッドを

本 調 査

旧 石 器

表 土 層

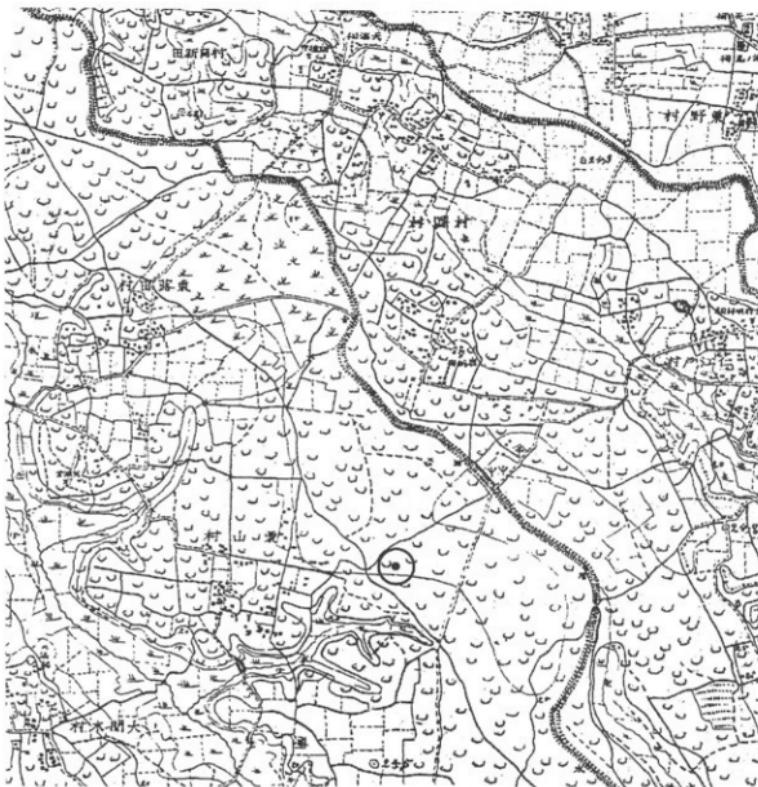
グリッド

基 本 枠

設定し、やはり北西隅を起点に西から東へ01~05、06~10……21~25までのアラビア数字を付して、数字アルファベットの順に組み合わせて1A-01グリッド等と呼称した。(Fig. 2)

既に試掘調査の段階で、旧石器時代の遺物が発見されていることから発掘調査はローム層を境に上層と下層調査の2段階とした。まず上層の本調査から開始し、その結果土坑20基、柱穴状遺構11基、溝状遺構1条が確認された。調査は、土坑が土層観察用ベルト(セクションベルト)を残し掘り下げ、柱穴状遺構は半分を掘り下げ、後に土層観察を行った。なお、遺構の状況においては土層観察用ベルトを設定せずそのまま掘り下げたものもある。またこれら遺構密度は全体に薄く、遺構の重複は全く見られなかった。しかも検出された土坑内より出土する遺

遺 物



2 Fig.1 氏神A遺跡付近の地形 (1:20,000) 遺跡 ◎

物は少なく、わずかに土坑 6 基に土師器の小破片が確認されたのみで、大半は出土遺物の少なさから検出遺構の所属する時期の確定はできなかった。したがって土坑や柱穴状遺構の多くは、その覆土や形状からみて風倒木痕もしくは木根痕と考え、およそ人為的な遺構ではないと判断した。

遺物は既述したようにその出土量は極端に限定されたもので、わずかな土器類と石器 1 点が検出されたのみである。まず土器類は縄文土器、土師器、陶磁器類があり、縄文土器は前期後半の小破片 4 点が出土し、土師器は 5 世紀代の壺・甕・高环形土器で、実測可能な土器 5 点を図示した。こうしたわずかな遺物の中でも注目されるのは唯一出土の石器である。この石器は旧石器時代終末に属する黒曜石製の細石刃核で先の試掘調査の際に出土したものである。出土層位は調査区北東隅のソフトローム上層であり、今回の本調査でもこの細石刃核出土地点を中心下層調査として 2 地点を深掘して旧石器文化層の確認を実施したが、あい

細石刃核

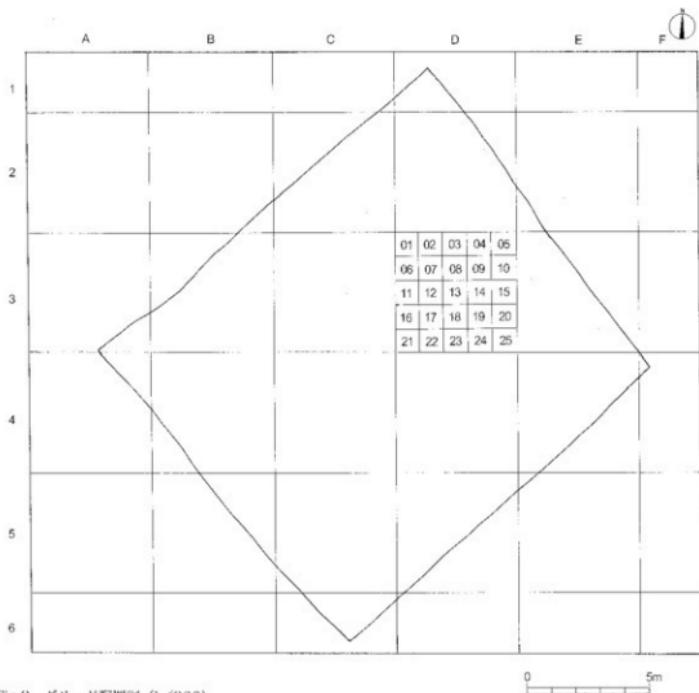


Fig.2 グリッド配置図 (1/200)



にく文化層およびその関連遺構や遺物の確認はできなかった。しかし、細石刃核の出土は県内でも数少なく試掘調査出土とはいえ貴重な資料を提供したことは間違いない。

C. 調査日誌

9.22 本日より本調査を開始する。バックホーによる表土層排除を調査区南東側より開始。表土層は20~30cm前後である。

9.24 バックホーによる表土層排除作業の継続。費機力による表土層除去は完了する。また本日より作業員を導入し、遺構確認精査を実施し、調査区西側から上坑等の遺構を確認する。

9.25 調査区東側の遺構確認精査を完了し、精査後の全景写真撮影、調査区域のグリッド杭打ち。遺構調査を開始する。柵柵は調査区南隅より実施し、同時に遺構番号を付する。土坑調査は長袖もしくは状況に応じて短袖中央にセクションベルトを設定し、発掘を行い、土坑SK01~11、13の12基をセクションベルト設定後、床土除去を行う。

9.29 遺構調査の継続。新たに検出された土坑SK14~18の5基のセクションベルトを設定し、床土排除を行う。また昨日のSK05、07、09の床土排除作業を継続する。床土排除したSK02~04、10、11、13~15の8基の土坑断面実測を完了する。

9.30 遺構調査の継続。新たに検出された土坑SK19、20と既に確認されていた土坑SK12の3基をセクションベルトを設定し、床土排除を行う。継続して土坑SK01、05、07~09、16、18の床土排除を実施する。また床土排除したSK09、16、19の3基の土坑断面実測を完了する。土坑断面実測を完了した土坑SK02~04、09~11、13~15、17の各上層写真撮影を行った。また上層断面写真撮影終了した土坑のうち、SK02~04、10、11、13、15、17の8基のセクションベルトを除去し清掃、全景写真撮影を行う。新たに検出された柱穴状遺構P-01~10の10基の調査を開始する。すべて土層断面観察のため、遺構の半分のみ調査する。さらに旧石器文化層確認のための下層調査を開始し、調査区を設定する。

10. 1 遺構調査の継続。上坑SK12、19、20の床土排除を完了する。また土坑SK12、18の上層断面実測を行う。土坑SK01、06~08、12、13、15、16、18、19の各土層断面写真撮影。さらにセクションベルト除去後、土坑SK01、05~09、14、16、18~20の全景写真撮影。柱穴状遺構P-01~11の土層断面実測および平面実測、全景写真撮影を完了する。溝状遺構SD01の調査を開始する。土層断面実測後、セクションベルト除去し、全景写真撮影を実施する。旧石器文化層確認グリッドの発掘調査を開始する。P1グリッドはⅣ層まで調査を行い、P2グリッドはⅢ層下部まで調査を実施するが、遺物等の出土はない。

10. 2 遺構調査の継続。土坑SK01~05、07~17の断面実測を行う。土坑SK18、19の平面実測を完了する。柱穴状遺構P-09~11を発掘する。溝状遺構SD01の平面実測を完了する。旧石器文化層確認調査の継続。P1グリッドは武藏野ローム層上部まで調査を行うが出土遺物は確認できなかった。またP2グリッドはⅣ層下部まで調査し、やはり遺物の出土は確認できなかった。調査区内の遺構配置図作成を開始する。縮尺は50分の1とする。

10. 3 遺構調査の継続。土坑SK06、20の平面実測、断面実測を完了し、すべての遺構調査を終了する。旧石器文化層確認調査の継続。P1グリッドの土層断面図を作成する。および土坑断面写真撮影を実施する。P2グリッドは武藏野ローム層(ⅩⅡ層)まで調査を行い、発掘を終了する。調査区内の遺構配置図を作成する。

10. 5 遺跡見学会を開催する

10. 6 遺構検出面清掃を実施。全景写真撮影を行う。P2グリッドの上層断面写真撮影を行い遺構調査のすべてを終了する。旧石器文化層確認グリッドの廃棄し作業を開始する。

10. 7 器材の撤収作業を実施し、発掘調査を終了する。

(小川 和博)

II 遺跡

1 遺跡の位置と環境

八千代町は、東側に鬼怒川が流れ、西から南側にかけては飯沼に囲まれている。八千代町の地形は、このような沖積地である低地と洪積台地である結城台地に分けられ、台地の奥深くまで北西から南東方向に谷津田が入り込み、複雑な地形を形成している。八千代町内にある遺跡は、昭和56年から63年にかけて実施された町史編さん事業の遺跡分布調査によって131か所を数えるが、多くの遺跡が谷津田に面した台地上に立地している。

氏神A遺跡は、町内でも比較的の遺跡が密集している栗山・尾崎・大間木の地域にあり、大字栗山字氏神から大字東畠田字大須賀にかけて所在する。この地域は飯沼から深く入り込んだ入沼という谷津田に面しているが、氏神A遺跡は、さらに枝分かれした谷津田に西側と南側を囲まれた台地上に立地している。標高は約23mから24m、水田面との比高差は8mから10mである。現状は畑及び山林であ



Fig. 3 氏神A遺跡周辺の地形 (1:10,000) 発掘区 ◎

る。今回調査した場所は、遺跡の北東部の大字東落田字大須賀地区に入る。

氏神A遺跡は、分布調査によって採集された土師器片及び手づくね土器や滑石製模造品等が出上していることから、古墳時代中期から後期にかけての遺跡と考えられてきたが、今回の調査で、さらに縄文時代、旧石器時代にも遡ることが確認された。

2 周辺の遺跡

氏神A遺跡周辺の栗山・尾崎・大間木の地域は、八千代町内でも遺跡が密集している地域であり、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世にかけての遺跡が数多く立地している。この地域の21遺跡に限って時代毎に見てみると、ほとんどの遺跡が複合遺跡で、何時代にも渡って続いている遺跡が多い。

旧石器時代は、八千代町内では氏神A遺跡を含めて8遺跡あるが、この地域には1/2の4遺跡が立地している。

縄文時代は9遺跡あるが、前期の遺跡が多く、中期後期には減少している。

弥生時代は、八千代町内では12遺跡発見されているが、この地域には3/4の

番号	遺 跡 名	時 代						備 考
		旧石器	縄 文	弥 生	古 墳	奈・平	中 世	
1	氏神A遺跡	○	○		○	○		入沼東岸
2	氏神B遺跡				○	○	○	タ
3	下谷原南遺跡			○	○	○	○	タ
4	矢尻C遺跡		○		○	○		タ
5	氏神C遺跡	○	○	○	○	○		タ
6	古堂遺跡	○	○	○	○	○	○	タ
7	矢尻B遺跡	○	○			○	○	タ
8	矢尻A遺跡	○	○	○	○			タ
9	城山古墳群				○			タ
10	丸山遺跡				○	○		入沼海岸
11	松の木台遺跡					○		タ
12	天神後遺跡			○	○	○		タ
13	本天神南遺跡					○	○	タ
14	天神前遺跡	○	△	○	○			タ
15	尾崎城跡					○		タ
16	屋敷下遺跡	○	○	○	○	○	○	タ
17	立山遺跡			○	○	○		タ
18	前山西遺跡					○		タ
19	尾崎前山遺跡	○	○	○		○		タ
20	秋葉山古墳				○			タ
21	牧跡					○	○	タ

Tab.1 氏神A遺跡周辺の遺跡（栗山・尾崎・大間木地域）一覧表

9遺跡が集中している。ほとんどが後期の遺跡であるが、尾崎前山遺跡からは中期宮ノ台式土器に比定される土器が出土している。

古墳時代は、八千代町内では24遺跡確認されているが、そのうちの約6割の14遺跡がこの地域に集中している。古墳では、13基からなった城山古墳群があり現在2基の円墳が残っている。箱式石棺、埴輪、直刀、人骨等が出土しており、国の重要文化財に指定されている男子埴輪立像(奈良県大和文華館所蔵)は、この古墳群から出土したものと考えられている。また、尾崎の台地突端には全長約45mの前方後円墳である秋葉山古墳が立地している。

奈良・平安時代には、この地域のほとんどの遺跡が成立している。注目されるものに、牧跡や古代製鉄炉が調査された尾崎前山遺跡、二重になった蔵骨器が出土した古堂遺跡等がある。また、この時代の遺跡は、平将門との関連を考える上でも重要な地域である。

中世には、館跡である尾崎城跡があり、現在でも土塁や堀が残っている。また、古堂遺跡内にある墓地からは、板碑や町の文化財に指定されている五輪塔がある。

以上のように、氏神A遺跡の立地する地域は、地形的にも遺跡の分布から見ても分かるように、古代から人々の生活に適した地域であったことが伺われる。

(山野井哲夫)



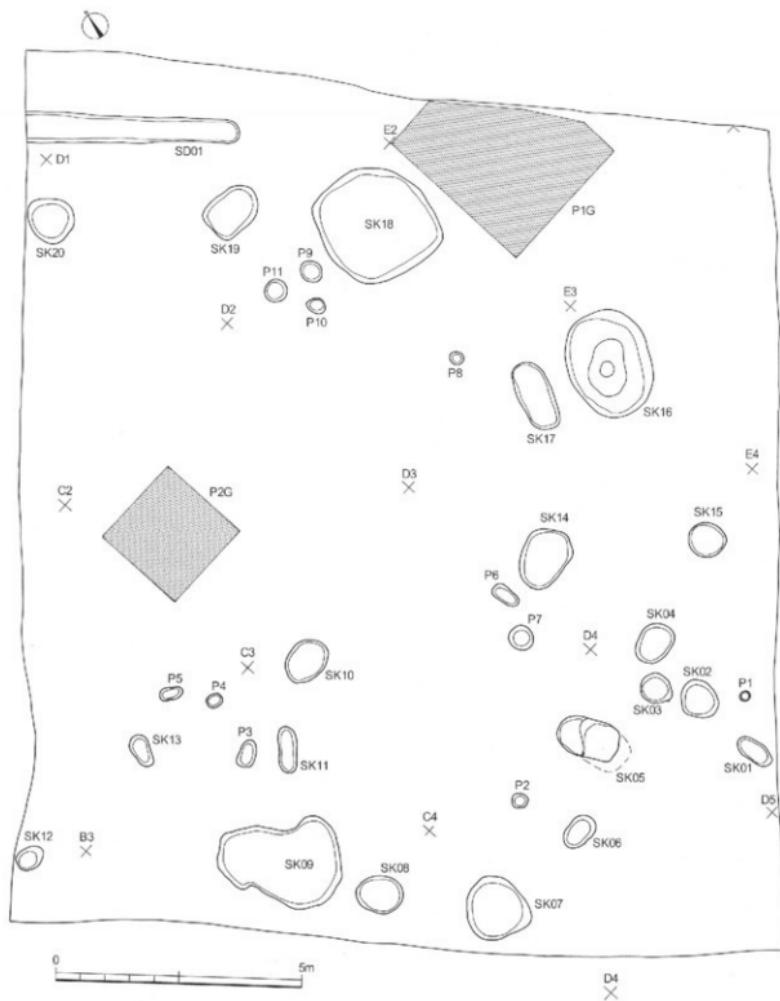
Fig. 4 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

*参考文献

- | | |
|-------------------|----------------------|
| ・八千代町史 通史編 | 昭和63年9月 八千代町史編さん委員会 |
| ・八千代町史 資料編 I (考古) | 昭和63年11月 八千代町史編さん委員会 |
| ・茨城県史 弥生時代 | 平成3年3月 茨城県 |
| ・尾崎前山 | 昭和56年3月 八千代町教育委員会 |
| ・栗山矢尻古墳 | 昭和51年4月 八千代町教育委員会 |
| ・氏神A 遺跡試掘調査報告書 | 平成9年7月 八千代町教育委員会 |



Fig.5 氏神A遺跡周辺地形図



10 Fig.6 氏神A遺跡調査区全体図

III 遺構と遺物

1. 旧石器時代

A 概要

本遺跡では先の試掘調査の段階で黒曜石製の細石刃核を検出している。出土地点は調査区北東端の5Cグリッド(P 1 G= グリッド)で、本調査の結果をみてても1点のみしか確認できず単独出土であることが判明した。この石器の出土層はⅢ層明黄褐色ローム上層(ソフトローム層相当)で、常緑台地における細石器文化をおさえる上で、非常に重要な資料を提供したと言えよう。ここではローム層上面だけの調査ではなく、さらに下層の文化層を確認する意味でP 1 Gの深掘りと別地点(P 2 G= グリッド、3Cグリッド)でも確認調査を試みているが、いずれのグリッドとも遺物および遺構等の検出はできなかった。しかし、遺物の出土はなかったものの、基盤となる土層を確認するため基本層序を下記のように示した。

本遺跡を構成しているローム層はⅢ層からXI層までの9層のローム層を分層した。Ⅲ層からIV層まではソフト化による侵食がみられ、層厚は一定しないが、VII層以下はある程度層厚をもって細分できることが大きな特徴である。以下I層表土層から各層の説明をしたい。

I層 表土層 黒褐色土(10YR 3/2) 締まりがなく、粘性に欠ける。層厚15~20cmを測る。

II Y層 黄褐色土(10YR 5/8) やや締まりにかけ、粘性に欠ける。層厚は12~18cmを測る。

II B層 暗褐色土(10YR 3/4) 締まりがあり、粘性にとむ。層厚は10~15cmを測る。

III層 明黄褐色ローム(10YR 6/6) ソフトローム層に相当する。黒色スコリアを少量含み、締まりがある。層厚は一定せず、P 1 Gでは8~15cmを測り、P 2 Gでは確認できなかった。

IV層 暗褐色ローム(10YR 3/3) ソフトローム層下部の漸移層に相当する。黒色スコリアを多く含む。締まりがあり、粘性に富む。層厚は一定せずP 1 Gで5~30cm、P 2 Gでやはり5~30cmを測る。

V層 黒色ローム(10YR 2/1) ブロック状の粘質土で堅緻であるが、締まりにやや欠ける。層厚はP 1 G、P 2 Gとも5~45cmを測る。ブラックバ

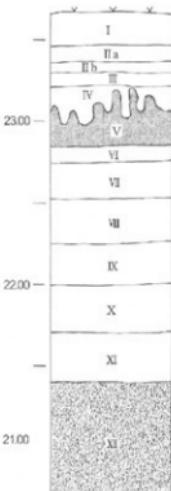


Fig.7 基本土層図

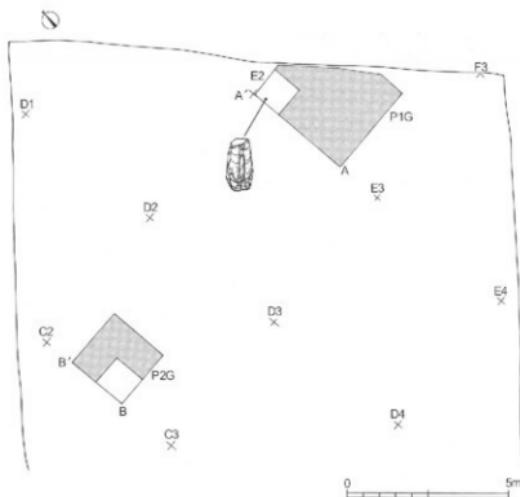


Fig.8 旧石器時代確認グリッド配置図

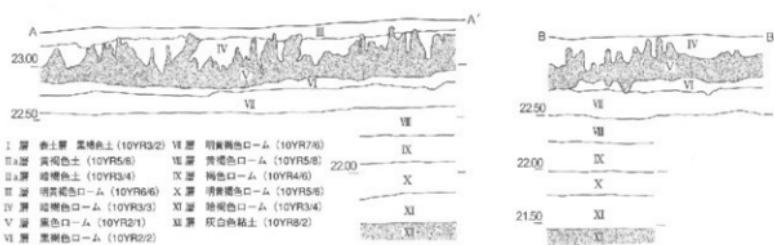


Fig.9 旧石器時代確認グリッド土層断面図

ンドに相当するといわれている。

VI層 黒褐色ローム (10YR 2/2) V層下部で、VII層の漸移層に相当する。粒子が比較的よく目立ち、綺まりにやや欠ける。層厚はP 1 G、P 2 Gとも一定し、3 ~ 11cmを測る。

VII層 明黄褐色ローム (10YR 7/6) 綺まりがあり、粘性にとむ。やや軟質である。

VIII層 黄褐色ローム (10YR 5/8) 黒色スコリアをわずかに含む。綺まりがあり、堅緻である。

IX層 褐色ローム (10YR 4/6) 綺まりがあり、堅緻である。より粘性が強い。

X層 明黄褐色ローム(10YR 5/6) 白色粘土粒をわずかに含む。締まりがあり、堅緻である。

XI層 暗褐色ローム(10YR 3/4) 締まりがあり、粘性にとむ。

XII層 灰白色粘土(10YR 8/2) 締まりがあり、堅緻で粘性が強い。

(小川 和博)

B 旧石器時代の遺物 (Fig. 10-11, PL. 12)

旧石器時代の遺物に関しては、試掘時にソフトロームから細石刃核が1点出土している。周囲を拡張したが、他に遺物は出土せず、単独資料であることを確認した。

本品は、いわゆる野岳・休場型細石刃核であり、高さ2.8cm、長さ1.8cm、幅1.7cm、重量9.2gを測る。両設打面(上端: 0.9cm、長さ1.2cm・下端: 幅1.2cm、長さ0.9cm)となっており、細石刃作業面はほぼ全周にわたって認められる。石材は、斑晶を全く含まない良質で半透明の黒曜石である。素材は、自然面の残存状況と全体の形状から、おおむね分割跡と推察される。作業面には、13面の細石刃剥離面が残されており、最終剥離面(打面の付近の小剥離面を除く)の観察によれば、幅0.8cm、長さ3.0cm程度の細石刃が生産されたことがうかがわれる。

剥離面の新旧関係によれば、細石刃は、当初、下端部を打面(調整打面)として、生産されたが、やがて階段状剥離(b面下端)が生じたためにスムーズな剥離が困難となり、やむなく、後に上端に打面を転位し、細石刃の生産を続けたことが理解される。そして、最終的には、打角の補正を目的として行った打面再生が不調に終わったために、廃棄に至ったものと跡づけられる。

翻って、氏神A遺跡の位置する宝木台地は、栃木県下を南流する鬼怒川と思川に挟まれ、下総台地の西部に連なる南北に細長い台地である。遺跡は、両水系の開拓によって形成された樹枝状谷間に面した台地縁辺部で検出されており、類例としては、図示したとおり、北から、小山市寺野東、金山、乙女不動原北浦、古河市鴻巣C及び風張遺跡。また、近隣では、足尾山地東麓の丘陵部から、坂田北や小倉水神社裏などの関連遺跡が発見されている。

広く関東全域に眼を転じると、この付近が高原山を除く遠隔地黒曜石の分布の東限(古鬼怒川水系)となることが理解され、本資料については、当時の黒曜石需給の様態を考える意味で重要な資料のひとつと位置づけられる。しかしながら、現状では、関連資料は、質量とも零細であり、詳細については今後の資料的蓄積を待つはかはれない。

なお、整理と並行して行った蛍光X線による黒曜石分析によれば、黒曜石の产地は、長野県霧が峰とのことである。(注)

(橋本勝雄)

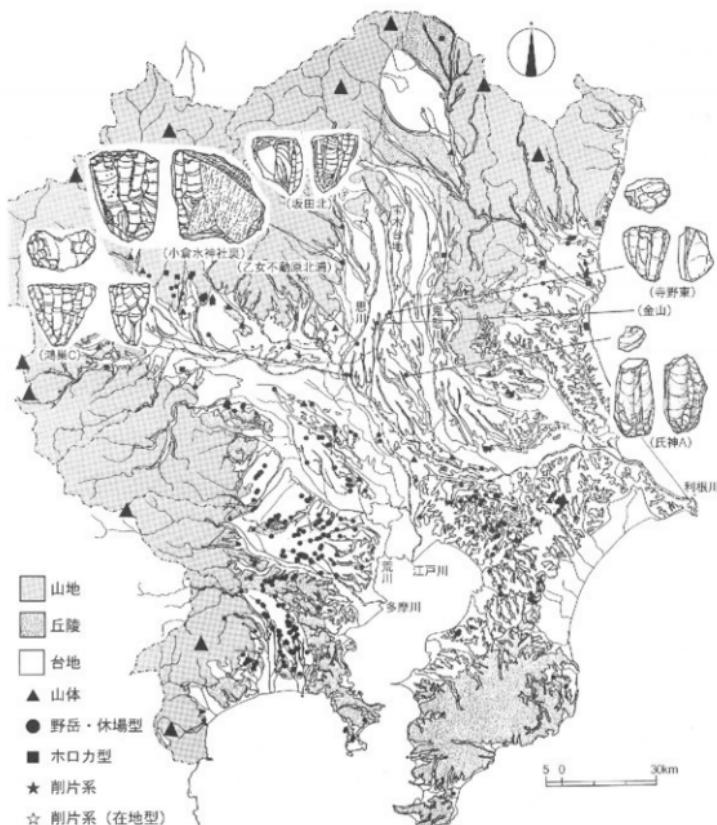
細石刃核

野岳・休
場型

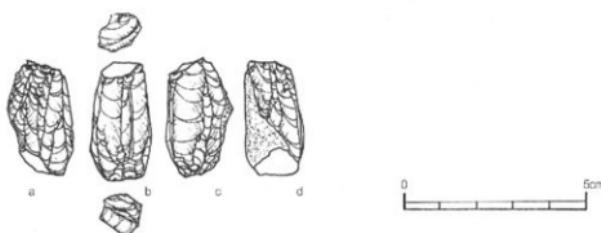
宝木台地

古鬼怒川

黒曜石分
析



関東地方における細石器遺跡と氏神A遺跡の周辺遺跡



14 Fig.11 細石刃核実測図

参考文献

- 1 田川良・道沢明 1974 「茨城県古河市周辺採集の先土器時代資料」
『史館』4
- 2 橋本勝雄 1995 「茨城の旧石器時代」『茨城県考古学協会誌』第7号
- 3 宇都宮大学考古学研究会 1981 「鹿沼市坂田北遺跡発掘調査概報」
『峰考古』3
- 4 小山市教育委員会 1982 『乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書』
- 5 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1990 『小倉水神社裏遺跡・水木東遺跡』
- 6 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1994 『寺野東遺跡－発掘調査概要報告－』

(注) 黒曜石分析について、沼津工業専門高等学校物質工学科望月明彦助教授の御厚意による。

2. 繩紋時代以降

今回の調査で遺構として土坑20基と柱穴状遺構11基が検出された。いずれも繩紋時代以降に属するもので、うち土坑6基から土師器小破片が出土している。また遺物は土師器の他に繩紋時代前期の土器がある。

A. 土坑(Fig. 12~17)

土 坑

今回検出された遺構のうち、いわゆる小竪穴もしくは竪穴状遺構とされる比較的規模の大きなものも土坑として分類した。この土坑検出例は調査区内で20基を数える。また規模や形態等同一形相に分類できるものではなく、各形態のばらつきが大きな特徴となっている。さらにその分布状況を見ると、調査区南半分に偏る結果を示しているものの、その規則性を見いだすことはできない。しかも土坑内の土層堆積状態を観察すると、大半は自然埋土で、わずか2基のみ埋戻し土層であった。しかも各土坑覆土に包含されていた遺物により所産時期を判別してみると、前述したように、土師器の小破片(図示できたものは1点もない)を包含したものは6基に過ぎず、これらすべてが出土土師器の示すように古墳時代の土坑であるかどうか疑問である。他14基は遺物の出土なしで、時期判別不詳であるが、覆土の状態から近世以降現代に近い時期と判断した。なお、以下所属時期には関係なく発掘調査した順に説明していく。

- 1号土坑** 1号土坑(S K01)(Fig. 12, PL. 3)
 調査区南部、5 D-16・21区に位置する。
 平面形は楕円形を呈し、長軸87cm、短軸60cm、深さ31cmを測る。長軸方向はN-26°-Wを示す。付帯施設として西壁に沿って長軸50cm、短軸21cm、深さ4.7cmの楕円形の掘込みを有する。底面はほぼ平坦で、一部硬化面が見られる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。
 覆土は4層に分けることができる。自然埋土である。
 1層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性に欠ける。
 2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性にやや欠ける。
 3層 暗褐色土(10YR 3/4) ローム粒子を多く含有。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。
 4層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を多く含有。締まりがあるが、粘性にやや欠ける。
- 2号土坑** 2号土坑(S K02)(Fig. 12, PL. 3)
 調査区南部、5 D-06・11・12区に位置する。
 平面形は、ほぼ円形を呈する。径は90cm、深さ7cmを測る。長軸方向はN-0°を示す。坑底には付帯施設として中央部から北側にかけて小ピット3個が存在する。いずれも楕円形を呈し、北西に位置するP 1は径23×14cm、深さ8cm。北東に位置するP 2は径23×14cm、深さ5cm。東側に位置するP 3は径31×18cm、深さ8cmを測る。床面は起伏に富み、壁は緩やかに立ち上がる。
 覆土は4層に分けることができる。自然埋土である。
 1層 黑褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を多く含む。締まり、粘性にとむ。
 2層 黑褐色土(10YR 2/2) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にとむ。
 3層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にとむ。
 4層 褐色土(10YR 4/4) ローム粒子を多く含有。締まりがあるが、粘性にやや欠ける。
- 3号土坑** 3号土坑(S K03)(Fig. 12, PL. 3)
 調査区南部、5 D-06区で検出されている。
 平面形は不整楕円型を呈している。長軸83cm、短軸60cm、深さ5cmを測る。長

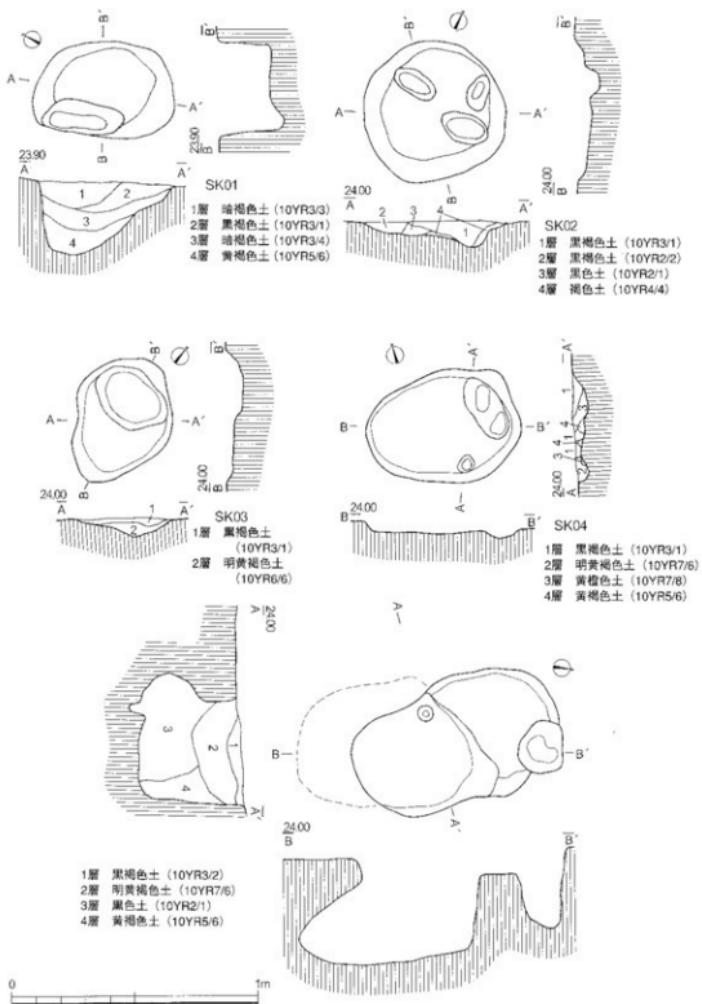


Fig.12 土壌平面図(1) (SK01~05)

軸方向はN-9° - Wを示す。なお付帯施設として北側に長軸50cm、短軸34cm、深さ3.3cmの楕円形の掘込みが見られる。床面は堅緻であるが、南方に傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は2層に分けることができる。自然埋土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 明黄褐色土(10YR 6/6) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

4号土坑 4号土坑(S K04)(Fig. 12, PL. 4)

位置は、調査区南部。5D-01・02・06・07区である。

平面形は梢円形を呈し、長軸97cm、短軸70cm、深さ4cmを測る。長軸方向はN-63°-Wを示す。坑底の付帯施設としてビットが1本と掘込み1個所が伴う。掘込みP1は東側に位置し、長軸41cm、短軸19cm、深さ4.8cmを測り、南際に位置するビットP2はほぼ円形を呈し、径12×11cm、深さ4cmである。床面は起伏が激しく、硬化面は確認できなかった。壁面は緩く立ち上がる。

覆土は4層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を多量に含む。締まりがあるが、粘性にやや欠ける。

3層 黄橙色土(10YR 7/8) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

4層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

5号土坑 5号土坑(S K05)(Fig. 12, PL. 4)

調査区南部の5C-04・09・10区に位置している。

袋 状 平面形は梢円形を呈し、北側がちょうど入り口部の段上部にあたり、両側が大きく袋状を呈しオーバーハングしている。また北側に柱穴状のビットを付帯施設としてもつ。確認面の長軸129cm、短軸81cm、深さ64cmを測る。長軸方向はN-50°-Wを示す。付帯施設である土坑北壁際には長軸32cm、短軸27cm、深さ33cmの柱穴状のビットが穿ってあり、または下段にも柱穴状ビットが穿孔している。円形を呈し、径10cm、深さ10cmを測る。上段部床面はほぼ平坦で全面硬化面が認められるが、下段床面はやや軟弱である。壁面は比較的堅緻である。

覆土は4層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/2) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性に

やや欠ける。

2層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子、ロームブロックを多く含有。締まりがあり、粘性に欠ける。

3層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

4層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子、ロームブロックを多く含む。締まりがあるが、粘性に欠ける。

6号土坑(S K06)(Fig.12, PL. 4)

6号土坑

調査区南部で5C-12・13区に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長軸76cm、短軸50cm、深さ20cmを測る。長軸方向はN-87°-Eを示す。坑底施設として柱穴状のピットが1基と浅い掘込みが伴う。土坑はほぼ中央に位置する柱穴状ピットは円形を呈し、径10×12cm、深さ14.5cm。このP1の南西方に接して、楕円形ピットP2は長径28cm、短径18cm、深さ8cmを測る。床面は起伏にとみ、やや軟弱である。壁面も若干軟弱で、垂直気味に立ち上がる。なお、覆土中より土師器小破片が1点のみ出土している。壺体部の小片のため図示はできなかった。したがって遺物の部位等明確ではないが、胎土や器面の整形から判断して所属時期は5世紀代に比定されるものと推定する。また覆土は自然埋土であるが、調査の関係からセクションベルトを設定できなかった。

土師器

7号土坑(S K07)(Fig.13, PL. 5)

7号土坑

位置は、調査区南西部で5B-05・10、5C-01・06区に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長軸143cm、短軸117cm、深さ64cmを測る。長軸方向はN-26°-Eを示し、床面はほぼ平坦で中央部に硬化面が見られる。壁面は堅緻ではば垂直に立ち上がり、部分的にオーバーハングが見られる。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を多く含有。締まり、粘性に欠ける。

2層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

3層 黄橙色土(10YR 7/8) ロームブロックを僅かに含む。締まりに欠け、粘性に富む。

8号土坑(S K08)(Fig.13, PL. 5)

8号土坑

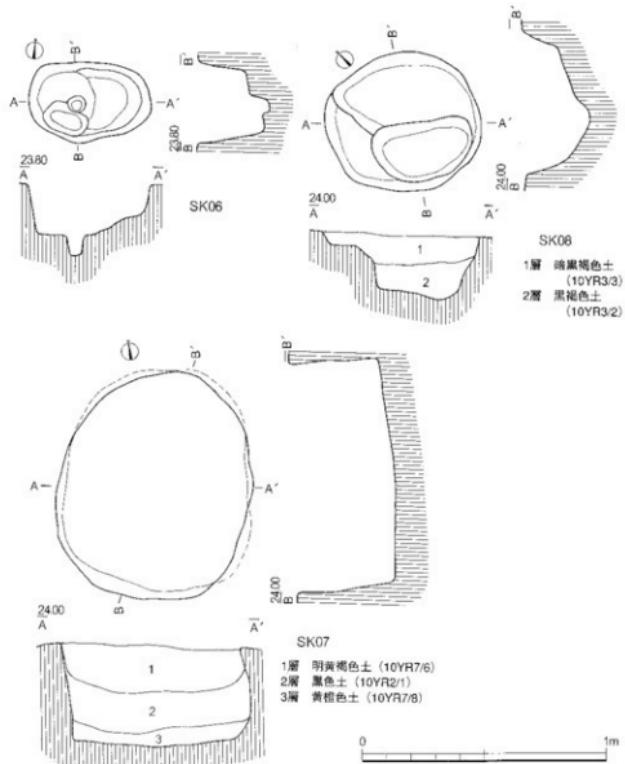
調査区西部、4B-19・24区に存在する。

平面形は不整円形を呈し、長軸95cm、短軸85cm、深さ28cmを測る。長軸方向はN-52°-Wを示す。形状は不整形で、大きく3段掘りとなっている。とくに南西方に掘り進められたピットは指円形を呈し、長径63cm、短径37cm、深さ3.8cmを測る。床面は起伏に富み、全体的に軟弱である。また壁面も軟弱で急傾して立ち上がる。

土 師 器

なお、覆土上中より土師器小片が1点出土している。坏口縁部破片であるが、現長2.8cmの土師器小片のため図示はできなかった。遺物の時期は口縁部横ナデの整形痕から判断して7世紀代に比定されるものと考える。また覆土は2層に分かれる。自然埋土である。

- 1層 暗黒褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を多く含有。締まり、粘性に欠ける。
- 2層 黒褐色土(10YR 3/2) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に



20 Fig.13 土坑平面図 (2) (SK06~08)

欠ける。

9号土坑(S K09) (Fig. 14, PL. 5)

9号土坑

調査区西部、4B-02・03・07・08・09・12・13・14区で検出されている。

平面形は不整楕円形を呈している。長軸 261cm、短軸 181cm、深さ64cmを測る。長軸方向はN-32°-Wを示す。床面は平坦で全体的に軟弱である。壁面も軟弱であるが、ほぼ垂直に立ち上がる。

なお、覆土中より土師器が1点出土している。壺口縁部破片である。現長わずか2.5cmの口縁部のみのわずかな残存であったが、口縁部破片のため復元実測を行った。折り返し口縁をもつ特徴的な土器である。小片のため時期の確定は難しいが口縁部の成形等から判断して5世紀代に比定される。その他図示できなかったが、土師器小破片6点が出土している。覆土は8層に分けられる。自然埋土である。

1層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

2層 黄橙色ローム(10YR 7/8)

3層 ローム混りの黒色土(10YR 2/1) ロームブロックを多量に含有。締まり、粘性に欠ける。

4層 灰黄褐色土(10YR 4/2) ローム粒子を多く含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。

5層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性にややとむ。

6層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性にやや欠ける。

7層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含有。締まり、粘性にとむ。

8層 明黄褐色土(10YR 6/6) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にともとむ。

土師器

10号土坑(S K10) (Fig. 14, PL. 6)

10号土坑

位置は、調査区西部4C-01・02・06・07である。

平面形は楕円形を呈し、長軸92cm、短軸72cm、深さ11cmを測る。長軸方向はN-75°-Eを示す。床面は平坦ではなく、やや起伏が目立ち、全体的に軟弱である。壁面も軟弱で緩やかに立ち上がる。

なお、覆土中より土師器小破片が3点出土している。いずれも現長1cm以下の

土師器

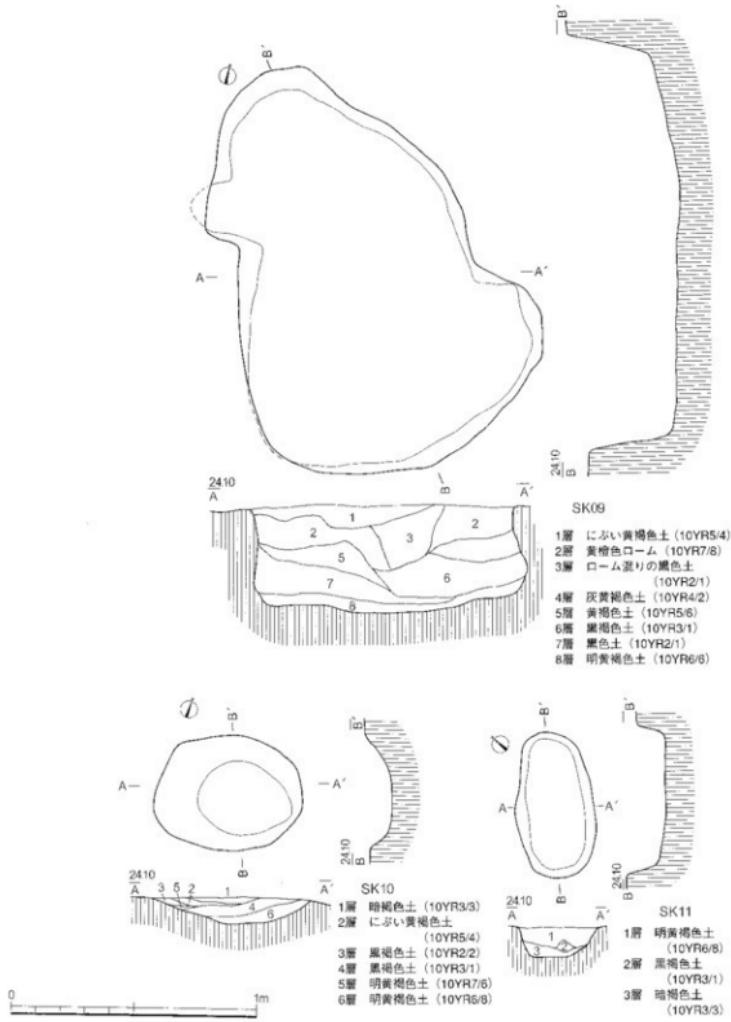


Fig.14 土坑平面図(3)(SK09~11)

小片のため図示はできなかった。したがって、遺物の器種や部位等の詳細は不明であるが、時期は胎土等からおそらく古墳時代後期の所産と思われる。また覆土は6層に分けられる。自然埋土である。

- 1層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子、炭化粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にもとむ。
- 2層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を多量に含有。締まり、粘性にとむ。
- 3層 黒褐色土(10YR 2/2) ローム粒子を僅かに含有。締まり、粘性にとむ。
- 4層 黒褐色土(10YR 3/1) 黒色粒子を僅かに含有。締まり、粘性にとむ。
- 5層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
- 6層 明黄褐色土(10YR 6/8) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

11号土坑(S K11)(Fig. 14, PL. 6)

11号土坑

調査区西部の4B-05区に位置する。

平面形は長楕円形を呈し、長軸91cm、短軸49cm、深さ17cmを測る。長軸方向はN-45°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、中央部分に硬化面が見られる。壁面は堅緻で、急傾して立ち上がる。

なお、覆土中より土師器小破片が2点出土している。いずれも壺体部破片で、現長は2.8cm、1.4cmの小片のため図示はできなかった。また遺物の時期についても詳細不明であるが、5~7世紀代の古墳時代中期から後期に比定される。覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

- 1層 明黄褐色土(10YR 6/8) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にとむ。
- 2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にとむ。
- 3層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を多量に含有。締まり、粘性にとむ。

12号土坑(S K12)(Fig. 15, PL. 6)

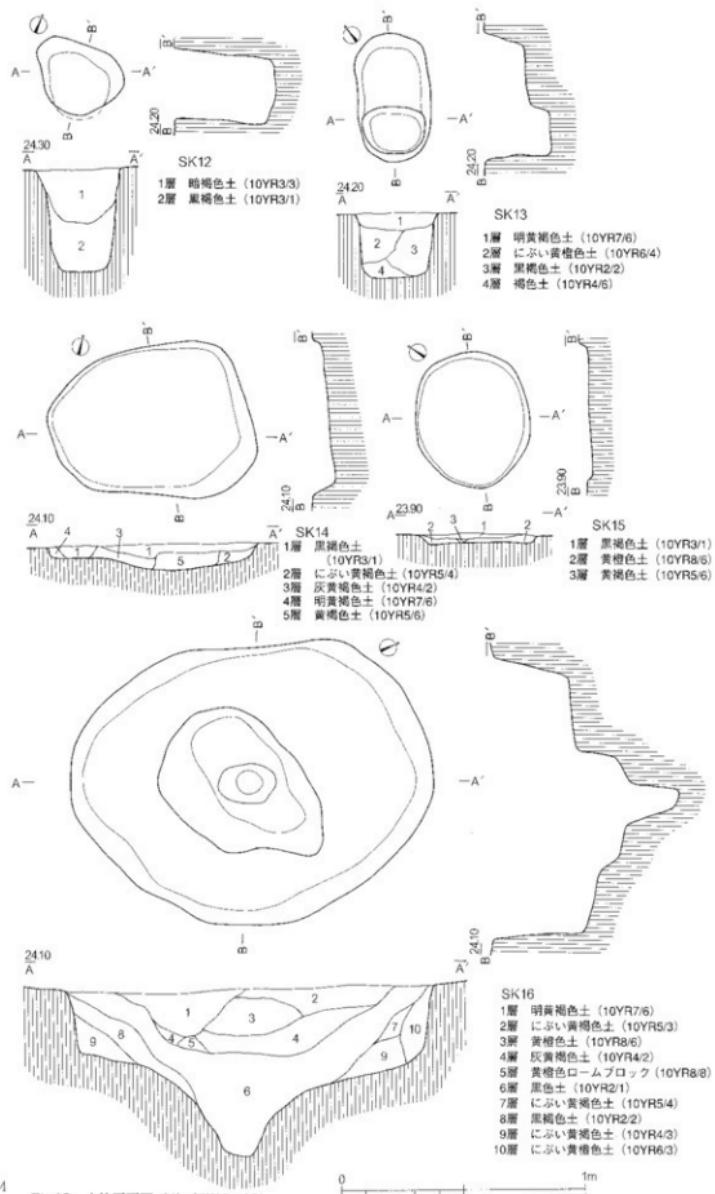
12号土坑

調査区西部、3A-14・15・19・20に位置する。

平面形は円形で柱穴状の掘込みを呈する。長軸55cm、短軸46cm、深さ64cmを測る。長軸方向はN-64°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、やや軟弱である。壁面は堅緻で、垂直に立ち上がる。

覆土は2層に分けられる。自然埋土である。

- 1層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含有。締まり、粘性に欠ける。
- 2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性に



も欠ける。

13号土坑(S K13)(Fig. 15、PL. 7)

13号土坑

位置は、調査区西部3B-13・18区である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸79cm、短軸45cm、深さ26cmを測る。長軸方向はN-38°-Eを示す。南西側に一段掘り窪めている。楕円形を呈し、長径39cm、短径29cm、深さ12.5cmを測る。床面はほぼ平坦で、中央部に硬化面が見られる。壁面はやや軟弱で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は4層に分けられる。自然埋土である。

1層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

2層 にぶい黄橙色土(10YR 6/4) ローム粒子を多量に含む。締まり、粘性にとむ。

3層 黒褐色土(10YR 2/2) ローム粒子を僅かに、黒色土ブロックを多量に含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。

4層 褐色土(10YR 4/6) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。

14号土坑(S K14)(Fig. 15、PL. 7)

14号土坑

調査区中央部南寄りに位置し、4D-11・12・16・17区に存在する。

平面形は長方形が崩れた隅丸長方形を呈し、長軸121cm、短軸97cm、深さ10cmを測る。長軸方向はN-60°-Eを示す。床面はやや起伏があり、全体的に軟弱である。壁面は堅緻で、急傾して立ち上がる。なお、覆土中より土師器小破片が1点出土している。甕底部破片で、現長3.0cmの小片のため図示はできなかった。胎土に長石粒を含み、焼成はやや不良。遺物の時期は5~6世紀代前後と推定している。覆土は5層に分けられる。自然埋土である。

土師器

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性にやや欠ける。

2層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。

3層 灰黄褐色土(10YR 4/2) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。

4層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。

5層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を多量に含む。締まり、粘性に欠ける。

- 15号土坑** **15号土坑(S K15) (Fig. 15, PL. 7)**
 調査区南東部の4 D-24、5 D-04区で検出されている。
 平面形は楕円形を呈しており、長軸84cm、短軸70cm、深さ2cmを測る。長軸方向はN-46°-Eを示す。床面は平坦で、中央部分のみ硬化面が見られ、壁面は堅緻で緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分けられる。自然埋土である。
 1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性にとむ。
 2層 黄橙色土(10YR 8/6) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。
 3層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を多量に含有。締まりがあり、粘性にとむ。
- 16号土坑** **16号土坑(S K16) (Fig. 15, PL. 8)**
 調査区東部東寄りの4 D-04・05・09・10・14・15、4 E-01・06・11区に位置する。
 平面形は不整楕円形を呈し、長軸224cm、短軸174cm、深さ114cmを測る。長軸方向はN-25°-Eを示す。中心部付近に大きく土坑が掘込まれ、さらに中央部にはビットが穿り中央部の掘込みは楕円形を呈し、長径115cm、短径76cm、深さ24cm。中央ビットは楕円形を呈し、長径35cm、短径25cm、深さ28.3cmを測る。床面は中央部にむかって傾斜し、全体がやや軟弱である。また壁面も軟弱で、ほぼ垂直に立ち上がる。
- ビット**
- 土師器** なお、覆土中より土師器が1点出土している。壺底部破片である。底部のみ1/8程残存している。小片であり、時期の確定は難しいが成形等から判断して5世紀代に比定される。覆土は10層に分けられる。人為的な埋戻し土層である。
- 1層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子、ロームブロックを多く含む。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。
 2層 にぶい黄褐色土(10YR 5/3) ローム粒子を多く含有。締まりにやや欠け、粘性にややとむ。
 3層 黄橙色土(10YR 8/6) ローム粒子を多く含有。締まりにやや欠け、粘性にやや欠ける。
 4層 灰黄褐色土(10YR 4/2) ローム粒子を僅かに含む。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。
 5層 黄橙色ロームブロック(10YR 8/8)
 6層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性に富む。
 7層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、

粘性にとむ。

- 8層 黒褐色土(10YR 2/2) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。
- 9層 にぶい黄褐色土(10YR 4/3) ローム粒子、ロームブロックを多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
- 10層 にぶい黄橙色土(10YR 6/3) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性にとむ。

17号土坑(S K 17)(Fig.16, PL. 8)

17号土坑

調査区中央部東寄りに位置し、3D-24、4D-03・04・08・09区に存在する。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸146cm、短軸80cm、深さ17cmを測る。長軸方向はN-26°-Eを示す。床面はほぼ平坦で全体的に軟弱である。壁面は緩やかに立ち上がる。

覆土は5層に分けられる。自然埋土である。

- 1層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含有。締まり、粘性に富む。
- 2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子、炭化粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 3層 褐色土(10YR 4/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 4層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 5層 黒褐色土(10YR 2/3) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性に欠ける。

18号土坑(S K 18)(Fig.16, PL. 9)

18号土坑

位置は、調査区中央部北寄りで、2D-23・24・25、3D-03・04・05・08・09・10・14・15である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸250cm、短軸234cm、深さ60cmを測る。長軸方向はN-71°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、全体に硬化面が見られる。壁面は堅硬で急傾して立ち上がる。

なお、覆土中より陶器小破片が1点出土している。小片のため図示はできなかった。また遺物の器種や時期についても詳細不明であるが、胎土や成形から判断して近代以降と想定している。覆土は12層に分けられる。埋戻し土層である。

- 1層 灰黄褐色土(10YR 4/2) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性に欠ける。(ビニール混入する)

陶 器

近 代

2層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性に欠ける。

3層 ロームブロック混りの黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

4層 黒褐色土(10YR 2/3) ローム粒子を僅かに含有。締まりがなく、粘性に欠ける。

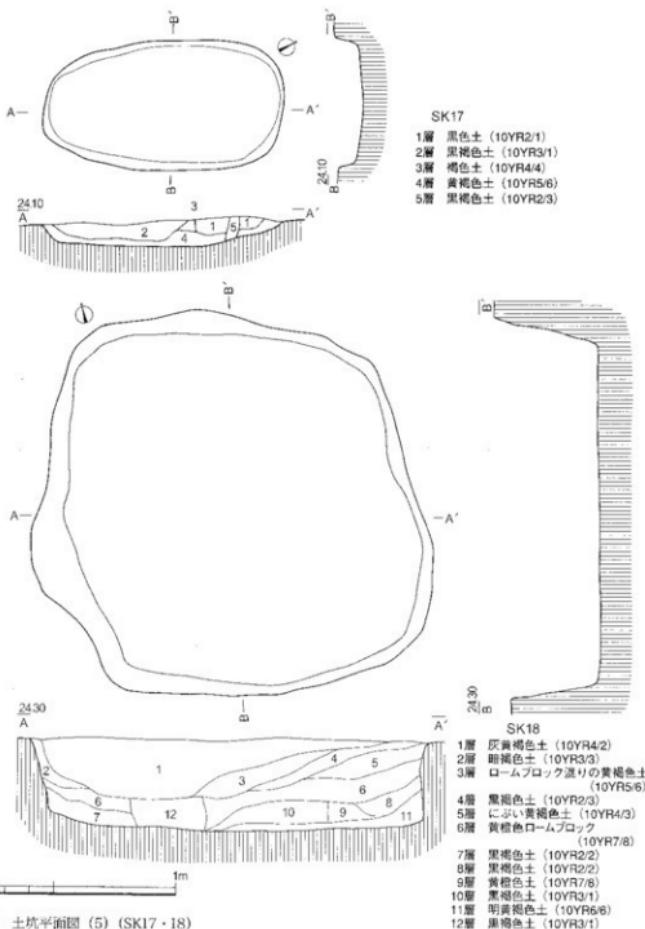


Fig.16 土坑平面図 (5) (SK17 + 18)

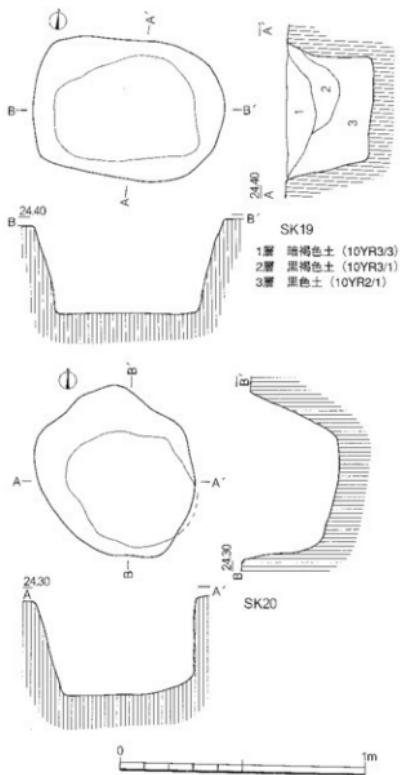


Fig.17 土坑平面図 (6) (SK19・20)

- 5層 にぶい黄褐色土(10YR 4/3) ローム粒子、ロームブロックを多量に含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。
- 6層 黄橙色ロームブロック(10YR 7/8) ロームブロック層。締まり、粘性に欠ける。
- 7層 黒褐色土(10YR 2/2)
ローム粒子、ロームブロックを僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。
- 8層 黒褐色土(10YR 2/2)
ローム粒子、ロームブロックを多く含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。
- 9層 黄橙色土(10YR 7/8)
ロームブロック層。締まり、粘性に欠ける。

10層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子、ロームブロックを僅かに含む。締まりに欠け、粘性にも欠ける。

11層 明黄褐色土(10YR 6/6) ローム粒子、ロームブロックを僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性にとむ

12層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。

19号土坑 (S K19) (Fig. 17, PL. 9)

調査区北部に位置し、2D-17・18区に存在する。

平面形は隅丸長方形を呈している。長軸118cm、短軸86cm、深さ55cmを測る。長

19号土坑

軸方向はN - 0°を示し、床面はほぼ平坦で、全面硬化面が見られる。壁面は堅緻で急傾して立ち上がる。覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含有。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含有。締まり、粘性にとむ。

3層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

20号土坑 20号土坑(S K20)(Fig. 17, PL. 10)

調査区北部に位置し、2 C - 04・05・09・10区に存在している。

平面形は不整円形を呈する。長軸108cm、短軸94cm、深さ55cmを測る。長軸方向はN - 31° - Wを示す。床面はほぼ平坦で、全体が軟弱である。壁面も軟弱で、緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土は自然埋土であるが、調査の関係でセクションベルトを設定できなかった。

B. 柱穴状遺構 (Fig. 18, PL. 10-11)

ビット 柱穴状遺構もしくはビット状遺構としたものは、覆土中からの遺物出土はなく、おおよその径が20cmから50cm前後で、柱穴状の比較的径に比して深いものと土坑状の浅いものを基準とした。やはり土坑と同じようにその分布状況を見る限り、規則的な配列を知るようなものはなかった。したがって、性格的なものについても不明である。

ビット1 1号ビット(P-01)(Fig. 18, PL. 10)

調査区南部、5 D - 12・17区に検出されている。

平面形はほぼ円形を呈している。径は22cm、深さ6cmを測る。長軸方向はN - 0°を示す。床面は北側が少し掘り込まれており、軟弱である。壁は急傾して立ち上がる。覆土は2層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 黄橙色土(10YR 8/6) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあるが、粘性に欠ける。

ビット2 2号ビット(P-02)(Fig. 18, PL. 10)

調査区南部の5 C - 02・07区に存在する。

平面形は不整円形を呈している。径は32cm×31cmで、深さ22cmを測る。長軸方向はN-15°-Eを示す。横断面はU字状を呈し、床面はやや軟弱である。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。縮まりがあり、粘性にとも。

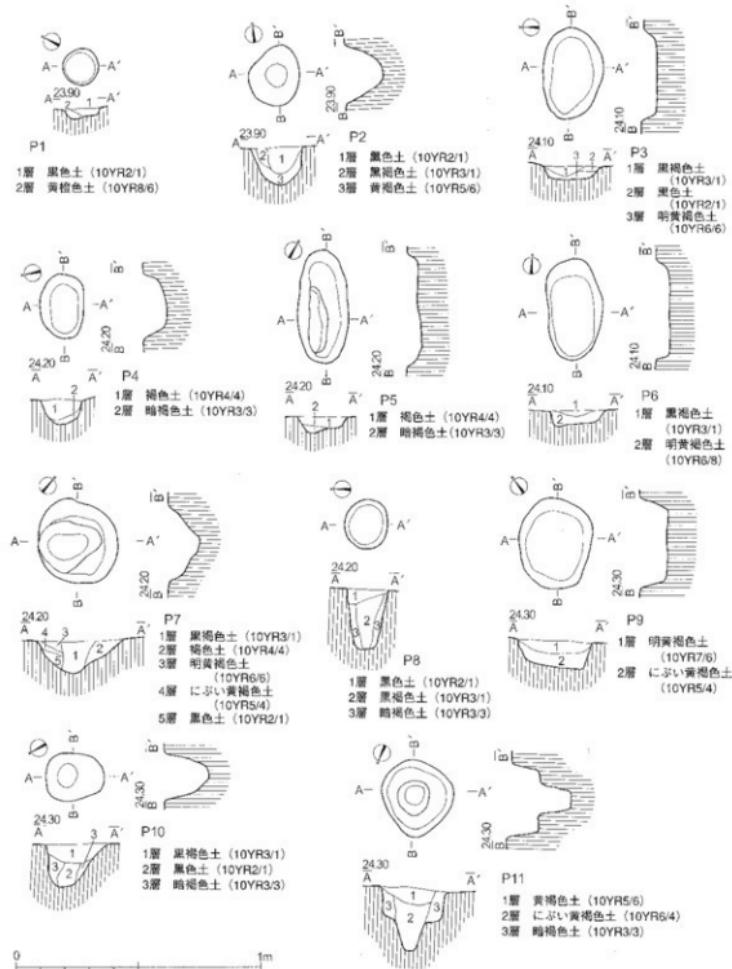


Fig.18 柱穴状造構(ピット)平面図(P1~P11)

2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

3層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を僅かに含有。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

ピット3 3号ピット(P-03)(Fig.18、PL.11)

調査区西部の3B-24・25、B-04区に位置している。

平面形は梢円形を呈する。長径56cm、短径37cm、深さ8cmを測る。長軸方向はN-0°を示す。床面は平坦で、軟弱。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を多く含有。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にややとむ。

3層 明黄褐色土(10YR 6/6) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。

ピット4 4号ピット(P-04)(Fig.18、PL.11)

位置は、調査区西部3B-19・20区である。

平面形は梢円形を呈しており、長径40cm、短径28cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN-78°-Wを示す。床面はすり鉢状で、軟弱である。壁は外傾して立ち上がる。

覆土は2層に分けられる。自然埋土である。

1層 褐色土(10YR 4/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

2層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性に欠ける。

ピット5 5号ピット(P-05)(Fig.18、PL.11)

調査区西部3B-14・19に存在する。

平面形は長梢円形を呈している。長径69cm、短径32cm、深さ10cmを測る。長軸方向はN-34°-Wを示す。床面南西側に浅い梢円形の掘り込みが見られる。長径40cm、短径19cm、深さ4cmを測る。床面はほぼ平坦で、軟弱。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は2層に分けられる。自然埋土である。

1層 褐色土(10YR 4/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。

2層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

6号ビット(P-06)(Fig.18, PL.11)

ビット6

調査区中央部南側の4C-15区に検出されている。

平面形は橢円形を呈している。長径60cm、短径34cm、深さ9cmを測る。長軸方向はN-8°-Wを示し、床面はほぼ平坦で、軟弱である。壁は緩く外傾して立ち上がる。

覆土は2層に分けられる。自然理土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

2層 明黄褐色土(10YR 6/8) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性に欠ける。

7号ビット(P-07)(Fig.18, PL.11)

ビット7

位置は、調査区中央部南側4C-20区である。

平面形は不整円形を呈している。径は55cm×49cmで、深さ19cmを測る。長軸方向はN-71°-Wを示す。床面は起伏しており、中心部に一段掘り込みが見られる。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は5層に分けられる。自然理土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性にも欠ける。

2層 褐色土(10YR 4/4) ローム粒子を多く含有。締まり、粘性に欠ける。

3層 明黄褐色土(10YR 6/6) ローム粒子を多く含む。締まり、粘性に欠ける。

4層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

5層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性に欠ける。

8号ビット(P-08)(Fig.18, PL.11)

ビット8

調査区中央部東側の3D-18・23区に位置する。

平面形はほぼ円形を呈する柱穴である。径は30cm×27cmで、深さ36cmを測る。

長軸方向はN - 0°を示す。床面は平坦で、軟弱である。壁は急傾して立ち上がる。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性にも欠ける。

2層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

3層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあるが、粘性に欠ける。

ピット9 9号ピット(P-09)(Fig.18, PL.11)

調査区中央部北側の3D-02・03区に位置している。

平面形は梢円形を呈し、長径55cm、短径45cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN - 18° - Wを示す。床面はほぼ平坦で、軟弱である。壁は緩く外傾して立ち上がる。

覆土は2層に分けられる。自然埋土である。

1層 明黄褐色土(10YR 7/6) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性に欠ける。

2層 にぶい黄褐色土(10YR 5/4) ローム粒子を僅かに含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。

ピット10 10号ピット(P-10)(Fig.18, PL.11)

位置は、調査区中央部北側の3D-07・12区に検出されている。

平面形は梢円形を呈している。長径37cm、短径28cm、深さ27cmを測る。長軸方向はN - 36° - Eを示し、横断面はU字状をなし、床面はやや軟弱である。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 黒褐色土(10YR 3/1) ローム粒子を僅かに含む。締まり、粘性にとむ。

2層 黒色土(10YR 2/1) ローム粒子を僅かに含有。締まりがあり、粘性にとむ。

3層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含む。締まりがあり、粘性にとむ。

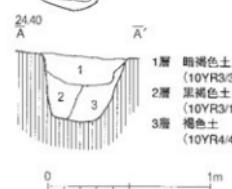
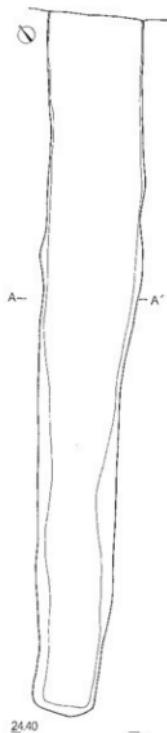


Fig.19 溝状遺構 (SDOI) 平面図

11号ピット (P-11) (Fig. 18)

ピット11

調査区中央部北側の3 D-01・02区で検出された。

平面形は径44cm×43cm、深さ18cmの円形ピット内に、新たにほぼ中央にピットが穿っている。このピットは径24cm、深さ39cmを測る。長軸方向はN-63°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、新期ピットをほぼ中央部を掘り込んでいる。

覆土は3層に分けられる。自然埋土である。

1層 黄褐色土(10YR 5/6) ローム粒子を僅かに含む。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。

2層 にぶい黄褐色土(10YR 6/4) ローム粒子を僅かに含有。締まりに欠け、粘性に欠ける。

3層 暗褐色土(10YR 3/3) ローム粒子を僅かに含有。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。

C. 溝状遺構 (Fig.19, PL.10)

溝状遺構

溝状遺構として調査区北側1 D-21、2 D-01・02・07・13・14区より1条検出された。若干ずれるものの、概ね調査区グリッドに対応して沿うように構築されていた。北西側が大きく調査区外に延びており、その規模は不明であるが、確認された溝の大きさは、幅が最も狭い南西端で39cm、最も広い北東端で64cmと北方に向かって広がっていく。また深さは南北端の浅い地点で11.7cm、北東端の深い地点で50.7cmを測り、南西方から北東方に傾斜している。

因に確認された長さは432cmである。なお、南西端を起点とする方位はN-48°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、軟弱である。壁面はやや軟弱で垂直気味に立ち上がる。出土遺物はなかったが、覆土の堆積状況から近代以降の所産に比定され

近代

る。覆土は3層に分けられる。自然埋上である。

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子をわずかに含み、締まりに欠け、バサバサしている。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1) 黒色土ブロックを多量に含み、締まりに欠け、粘性に欠ける。
- 3層 褐色土(10YR4/4) ローム粒子をわずかに含む、締まりに欠け、粘性に欠ける。

3. 遺 物

縄紋土器

縄紋土器が4点出土している。1点のみ本調査で検出され、他は確認調査で出土したものである。いずれも縄紋前期後半の土器である。1は口縁部破片で、口唇部の形状が内削状を呈している。口縁部はほぼ直立しながら口唇部で若干外傾する。紋様は口唇部から無節L横回転で施紋され、内面は横位の細かなヘラナデが施されている。胎土に微細な石英粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する(確認調査A-C区出土)。2も口縁部破片である。小片資料のため器形を伺い知ることはできないが、小波状を呈するようである。口縁部はほぼ直立し、口唇部でやや肥厚する。紋様は口唇部下部から無節Lによる縱回転施紋している。内面は横位のヘラナデ整形が施されている。胎土に微細な石英粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は明赤褐色(2.5YR5/8)を呈する(確認調査A-B区出土)。3は体部破片である。部位は不明であるが体部上半部と推定される。紋様はやはり無節L縦位回転で施紋されている。内面は横位の丁寧なヘラナデである。胎土は微細な石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は外面が黒褐色(5YR2/1)、内面が橙色(2.5YR6/8)を呈する(本調査C3区出土)。4も体部破片である。小片のため部位は不明である。紋様は無節Lの縦位回転施紋で、内面は横位のヘラナデを施す。胎土中に微細な石英粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は明赤褐色(2.5YR4/8)を呈する(確認調査A-B区出土)。

土師器

B. 土師器 (Fig.21, PL.12)

土師器は土坑および包含層より出土している。完存品ではなく、すべて破片資料である。しかもすべて小片であり、復元実測した5点の土器は、いずれの器形も推定したものである。

1は壺形土器である。口縁部破片で、残存率はわずかに5%に過ぎない。折返し口縁で、口縁部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、頭部で括れる。推定口径20.0cm、現器高4.5cmを測る。なお折返し口縁は粘土帶の貼付けで、その幅は2.7cmである。外面口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ。内面は横位のヘラナデ整形が施されている。胎土中に長石粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。土坑S K09覆土中より出土。2は壺形土器の底部破片で、残存率は約12%である。平底の底部から球形の体部へ移行するものと思われる。ほぼ直線的に外方へ大きく開く。推定底径9.1cm、現器高2.8cmを測る。外面は斜行するヘラ削りと縦位のヘラナデ。底部は比較的粗いヘラ削り。内面丁寧なヘラナデを施す。微細な長石粒・石英粒を含み、焼成は良好、硬質である。色調は橙色(5YR6/8)を呈する。土坑SK16覆土中より出土している。3は壺形土器の口縁部破片で、残存率はわずか12%である。口縁部は緩く外反し、球形の体部に移行するものと推定される。推定口径18.0cm、現器高4.3cmを測る。外面口縁部上半部は横ナデ、下半部は縦位のヘラ削り、体部はヘラナデで、頭部にヘラ工具の

壺

壺

壺

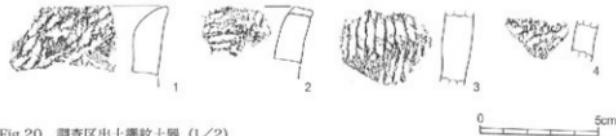


Fig.20 調査区出土繩紋土器 (1/2)

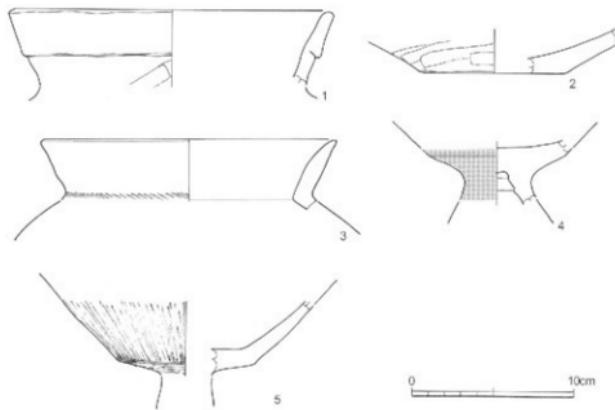


Fig.21 調査区出土土師器 (1/3)

高 坯 当て具痕が明瞭に残置している。内面は横位のヘラナデ整形によって仕上げられている。胎土中に石英粒を含み、焼成は良好、硬質である。色調は浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。確認調査A区より出土している。4は高坏形土器の坏部下部の破片である。坏部下部の約1/3を残存している。坏部は脚部に対して内彎気味に大きく開き、脚部は円柱のまま貼付けている。現器高3.8cmを測る。外面坏部・脚部とも赤彩が施され、坏部内面はヘラナデ整形が見られる。また脚部内面はシボリ痕が残置する。胎土中に石英粒を含み、焼成は良好、硬質である。色調は内面褐色(10YR4/1)を呈する。確認調査A区より出土。5も高坏形土器である。坏部底部約1/6程を残存する。坏部底部に明瞭な稜線をもち、内彎気味に外方へ開く。現器高4.6cmを測る。坏部外面は上半部は縱位のヘラ磨き、下部は斜行するヘラ磨き。内面はナデ整形で仕上げられている。胎土中に微細な長石粒を含み、焼成は良好、硬質である。色調は外面が暗赤褐色(5YR3/3)、内面が黒色処理が見られる。本調査C4区より出土している。

以上図示した復元実測の5点の土師器はいずれも5世紀代に比定されるものと考える。

(小川和博・大瀬淳志・鐵治文博)

IV まとめ

鬼怒川と思川に挟まれた宝木台地の一支台に形成された氏神A遺跡は、かつて滑石製模造品(双孔円板)と手づくね土器の出土で知られた古墳時代の祭祀遺跡である。当然今回の調査でもこれらに関連する遺構・遺物の存在が期待された。しかし、既に報告のとおり、遺構として古墳時代に属すると推定される5基を含めた20基の土坑と時期不詳の柱穴状遺構11基、溝状遺構1条。遺物として旧石器時代終末の細石刃核1点、縄文時代前期後半の土器4点と5世紀代の土師器が出土したに過ぎない。したがって祭祀に関連する遺構・遺物の検出はなく、わずかに検出された5世紀代の土師器の出土がかろうじて祭祀遺跡の存在を示唆している。もちろん、今調査範囲は氏神A遺跡のほんの一端であり、祭祀行為等の遺跡の性格究明を含めた全体像を解明することは現状では困難であり、将来的に調査がさらに進んだ段階で改めて検討すべきであろう。

こうした限られた資料の提供にもかかわらず、祭祀関連以外にも1、2の問題点が指摘される。以下では今回の調査および整理の結果認識された今後の課題として旧石器時代と土坑について触れ、まとめとしたい。

遺 構

課 題

遺構 番号	形 狀	規格		深度 (cm)	方位	出土遺物
		長軸	×短軸(cm)			
SK01	楕円形	87.0	×60.0	31.0	N-26°-W	なし
SK02	円形	90.0	×90.0	7.0	N-0°	なし
SK03	不正楕円形	83.0	×60.0	5.0	N-9°-W	なし
SK04	楕円形	97.0	×70.0	4.0	N-63°-W	なし
SK05	楕円形	129.0	×81.0	64.0	N-50°-W	なし
SK06	楕円形	76.0	×50.0	20.0	N-87°-E	土師器1
SK07	楕円形	143.0	×117.0	64.0	N-26°-E	なし
SK08	不正円形	95.0	×85.0	28.0	N-52°-W	土師器1
SK09	不正楕円形	261.0	×181.0	64.0	N-32°-W	土師器1
SK10	楕円形	92.0	×72.0	11.0	N-75°-E	土師器3
SK11	長楕円形	91.0	×49.0	17.0	N-45°-E	土師器2
SK12	円形	55.0	×46.0	64.0	N-64°-W	なし
SK13	圓丸長方形	79.0	×45.0	26.0	N-38°-E	なし
SK14	圓丸長方形	121.0	×97.0	10.0	N-60°-E	土師器1
SK15	楕円形	84.0	×70.0	2.0	N-46°-E	なし
SK16	不正楕円形	224.0	×174.0	114.0	N-25°-E	土師器1
SK17	圓丸長方形	146.0	×80.0	17.0	N-26°-E	なし
SK18	圓丸方形	250.0	×234.0	60.0	N-71°-W	陶器1
SK19	圓丸長方形	118.0	×86.0	55.0	N-0°	なし
SK20	不正円形	108.0	×94.0	55.0	N-31°-W	なし

Tab.2 土坑観察表

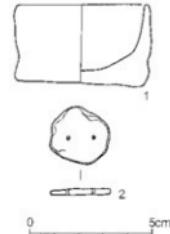


Fig.22 氏神A遺跡出土の
(飯岡長治氏蔵)
祭祀遺物
文献3より

- 旧石器** (1) 本遺跡出土遺物で最も注目されるのは旧石器時代終末の細石刃核である。II層除去後のIII層ソフトローム層上層から出土したものである。黒曜石製の極めて定形化した石核であり、県内の出土例を増やしたことになる。また石核そのものが石器製作と関連が深いということで、出土地点を中心に調査を広げ、さらに部分的ではあるが、ランダムに設定した40×40cmの小グリッド10地点におけるロームの水洗選別調査(フローテーション)を行ったにもかかわらず、剥片はもちろん碎片ですら検出されない状況であった。
- 細石器** 平成6年、茨城県教育財團・旧石器時代研究班では「茨城の細石器集成」として過去に報告され出土した県内出土の細石器・細石刃核を網羅し、その分析を試みている。資料の少なさからいわゆる「細石器文化期」における細石刃・細石刃核共伴組成以外の器種の出土の遺跡や石器組成、石材組成を含めた総合的な背景については今後の課題として残しているが、本遺跡でも問題となっている細石器単独出土遺跡の実態については、今回の調査でひとつの提言が可能と思われる。つまり報文のとおり本遺跡は細石刃剥離作業が完了し、再び石核再生や楔形石器等の器種変換を行わず廃棄した『細石刃核単独出土遺跡』であることを確認できた。これは少なくとも石核出土地点周辺では石器製作を行っていなかったこと、またこれはかつて小林達雄氏が指摘した「セトルメント・パターン」の考え方方が有効であること。しかもややおおげさになるが、この1点の細石刃核は旧石器社会の背景や状況に当然の関わりを持つわけで、そこには移住形態、しいては社会的構造をも示唆できる要素が十分に存在することが予想されるのである。
- 土坑** (2) 本遺跡では、遺構として土坑、柱穴状遺構、溝状遺構が検出され、内土坑は20基を数える。既述したように規模や形状、深度等から形相分類は難しく、各形態のバラツキが大きな特徴となっている。またこの中で8基が覆土より遺物が検出されている。すべて遺構の共伴遺物として認識されるもので、5世紀代の土師器が出土した土坑はSK06・08・09・10・11・14・16の7基、残り1基土坑SK18が近世陶器を出土している。規模等については前頁一覧表に記載したとおりである。またこれら土坑の機能を考えた場合、諸説があるが、ここでは規模、形態の共通性を見いだすことができず、その用途は多種にのぼるものと考えられる。ただ調査区外より図示した良好な祭祀遺物が出土しており、これらに伴う集落跡の存在が想定される。したがって、確認はされてはいないが、祭祀を行った集落とこれら土坑とは密接な対応関係があるものと予想される。またその他の土坑については、共伴遺物の出土ではなく、遺物等から時期を判断するものはない。しかし、近世遺物の出土したSK18をモデルに他の土坑覆土の特徴をみてみると、すべて近世もしくは近代にかけて属すると考える。やはり、その機能につ
- 祭祀遺物**

て明確のものではなく、しかも長期にわたって利用されたと考えられるものもない。したがって、近世以降集約的な土地利用がなされた区域ではなかったと判断される。

(小川 和博)

参考文献

1. 小林達雄 1980 「縄文時代の集落」『国史学』第110・111合併号 国史学会
2. 国立歴史民俗博物館編 1985 「共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 国立歴史民俗博物館研究報告第7集
3. 八千代町史編さん委員会編 1988 「八千代町(資料編Ⅰ)考古」八千代町
4. (財)茨城県教育財団・旧石器時代研究班 1995 「茨城の細石器集成」研究ノート4号

報告書抄録

ふりがな	うじがみえーいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	氏神A遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書7
編著者名	小川和博・大瀬淳志・鍛治文博・橋本勝雄・山野井哲夫
編集機関	八千代町教育委員会
発行機関	八千代町教育委員会
所在地	〒300-3592 茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170 TEL.0296-48-0525
発行年月日	西暦 1998年(平成10年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		経緯度		調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いにしへみえーいせき 氏神 A 遺跡	いばらきけん ひたち 茨城県結城 ぐん や し ら こ じ る 郡八千代町 おおやちょう 大字 東路 ひがいじゆ 田字大須賀 だいたすか 311-1、 811-8	08521	7 8	36度 9分 0秒	139度 55分 11秒	19970922 ～ 19971007	324	NTT 携帯電話 基地局設置に伴う発 掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事
氏神 A 遺跡	散布地	旧石器 縄紋 古墳(中)	土坑 20基 柱穴状造構 11基 溝状造構 1条	細石刃核 縄紋土器 土師器 陶器	

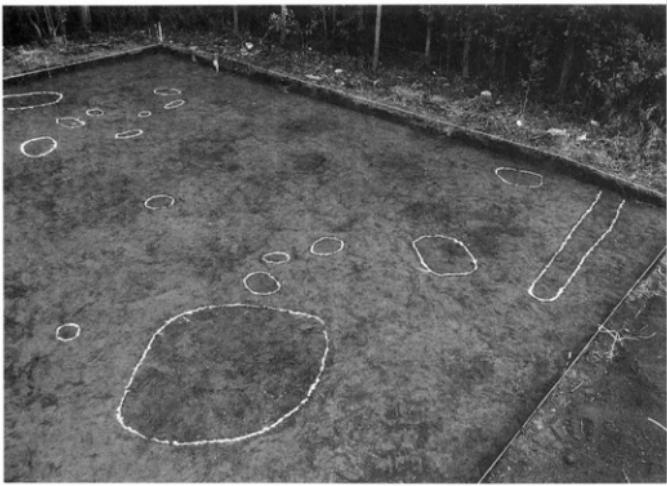
写 真 图 版



1 氏神A遺跡遠景



2 氏神A遺跡近景



3 氏神A遺跡遺構確認



1 先据区全景



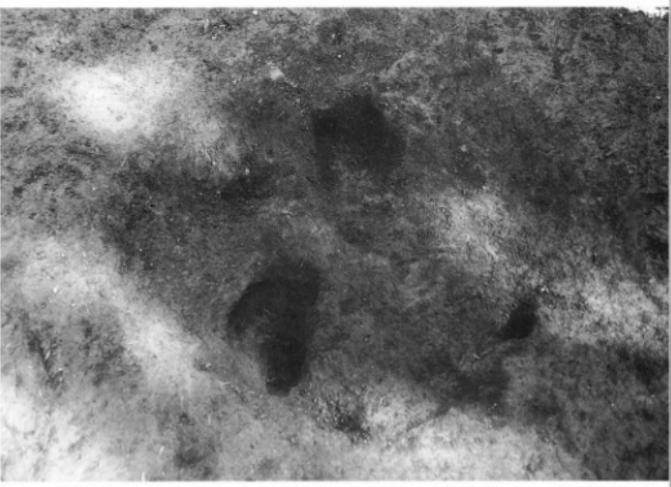
2 P1G断面



3 P2G断面



1 土坑SK01



2 土坑SK02



3 土坑SK03



1 土坑SK04



2 土坑SK05



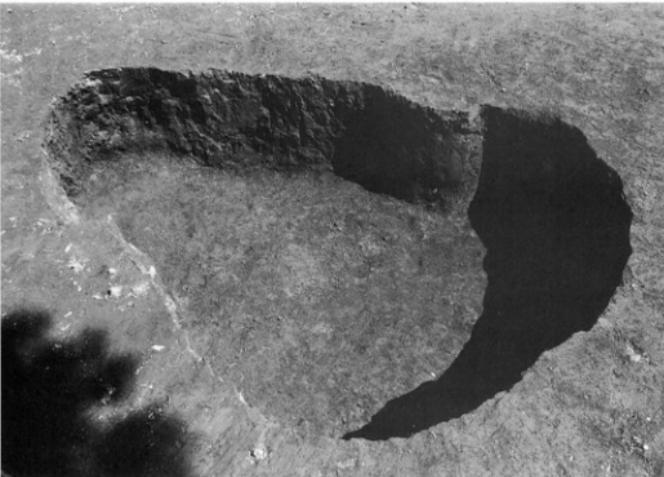
3 土坑SK06



1 土坑SK07



2 土坑SK08



3 土坑SK09



1 土坑SK10



2 土坑SK11



3 土坑SK12



1 土坑SK13



2 土坑SK14



3 土坑SK15



1 土坑SK16



2 土坑SK16断面



3 土坑SK17



1 土坑SK18



2 土坑SK18断面



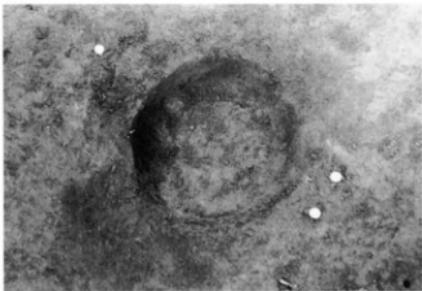
3 土坑SK19



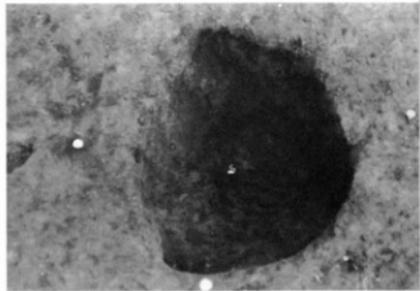
1 土坑SK20



2 清SD01

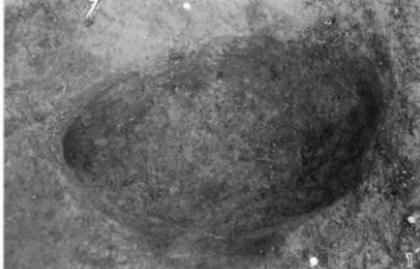


3 ピットP1



4 ピットP2

1 ピットP3
2 ピットP4



1

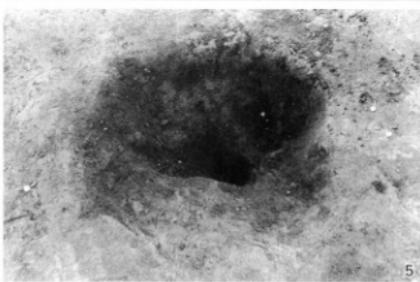
3 ピットP5
4 ピットP6



3

4

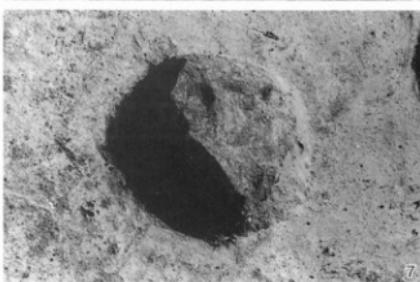
5 ピットP7
6 ピットP8



5

6

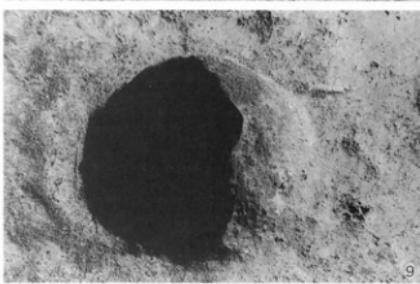
7 ピットP9
8 ピットP10



7

8

9 ピットP11
10 調査風景



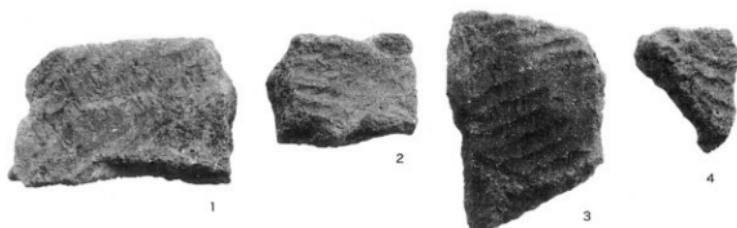
9



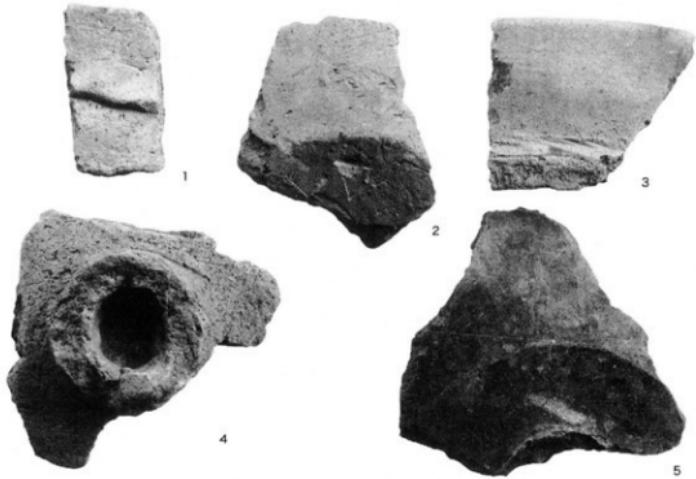
10



1 細石刃核



2 绳纹土器



3 土器

茨城県八千代町
氏神A遺跡発掘調査報告書

1998年3月25日 印刷
1998年3月31日 発行

編集 八千代町教育委員会

発行 八千代町教育委員会
茨城県結城市八千代町大字菅谷1170

TEL. 0296-48-0525

印刷 有限会社 田辺印刷
千葉県夷隅郡夷隅町苅谷663-4 TEL. 0470-86-2298